

第二十回 曹操書を抹りて韓遂を問つ、趙雲江を截りて阿斗を奪う

— 曹操の関中平定、阿斗を救う趙雲 —

(前回から今回まで)

曹操軍が渭水の南に陣營を完成したため、馬超・韓遂軍は前後を曹操軍に挟まれてしまいます。そこで、いったん、土地を割譲して和平を要請し、春の暖かくなるのを待つて再起を図ろうとします。いっぽう曹操は、参謀賈詡の意見を聞き、和平を受け入れたふりをして、馬超と韓遂を仲間割れさせようと策をめぐらします。

こうして、曹操は両軍が見守るなか、韓遂と会見します。

(本文抄)

翌日、曹操は、ぐるりと部将たちが取り巻く真ん中に、姿を現した。

韓遂配下の兵は、ほとんど曹操を見たことがなく、一目見ようと見物に来た。曹操は声を張り上げて言った。

「どうだ、曹公を見たいのか。わしとて人間だ。四つの目や二つの口があるわけではない。

ただ知恵が多いだけだ」

韓遂の将兵はみな恐しそうな表情を浮かべた。

曹操は、韓遂のもとに人をやうて伝えさせた。

「丞相は韓將軍とお話ししたいと言つておられます」

韓遂はただちに陣を出したが、曹操が劍もつけずよろい鎧かぶとも脱いでいるのを見て、自分も鎧かぶとを脱ぎ、二人は馬首をならべて、言葉を交わした。

曹操は言つた。

「わしと將軍の父上は同年に孝廉こうれんに推挙され、わしは実の叔父のように敬愛していた。また、きみとはともに役人になったが、いつのまにか歳月が流れてしまった。將軍は今年いくつになられたかな」

「四十です」と韓遂。

「昔、都にいたころは、おたがい若かったが、もう中年になつてしまつたな。どうか天下太平の世をともに楽しみたいものだ」と曹操。

あれこれ昔の思い出を話すだけで、軍事の話はまったくせず、曹操は話がすむとからからと笑つた。二時間ほど話し合つてから、馬首をめぐらして別れ、それぞれ自陣に帰つた。

このことを早くも馬超に報告する者があり、馬超は韓遂にたずねた。

「今日、曹操と何の話をしたのですか」

「都にいたころの昔話をしたただけだ」と韓遂。

「軍事については話さなかったのですか」と馬超。

「曹操が言わないのに、わしの方から持ち出せるわけがあるまい」と韓遂。

馬超は不審ふしんに思ったが、何も言わずに立ち去った。

### (解説)

曹操は韓遂と昔話きょうわに興きじるなど楽しげ気に談笑し、馬超に疑念ぎねんを持たせることに成功します。つづいて、賈詡かきは次の手を献策けんさくします。

### (本文抄)

曹操がその計略とは何かと聞くと、賈詡は答えた。

「馬超は勇だけの男で、機略については無知です。丞相じょうしょうが韓遂に手紙をお書きになり、手紙の途中であいまいな言葉を使い、かんじんなところは、消したり書き直したりして、封を

して韓遂に送りとどけ、またそれとなく馬超がこれを知るように仕向けるのです。そうすれば、馬超は必ず手紙を見せると言つて来るでしょう。手紙の重要なところが、書き直したり消したりしているのを見れば、馬超は韓遂が自分に知られるのを恐れて、書き直したり消したりしたのだと思うでしょう。それは韓遂が単騎たんきで丞相じょうしょうと会談した疑いとも符合かごうし、疑いが生じれば必ず混乱が起こります。そうすれば馬超を滅ぼすことができます」

曹操は「それは、うまい計略だ」と言い、一通の手紙を書き、重要な箇所はすべて書き直したり消したりしてから封をし、わざと大勢の従者を韓遂の陣営に派遣して手紙をとどけさせた。

はたして、このことを馬超に報告する者があつた。

内心、ますます疑いを深めた馬超は、ただちに韓遂のもとに出向き、手紙を見せるように求めた。韓遂は手紙を見せた。馬超は文面に書き直したり消したりした跡があるのを見て、韓遂にたずねた。

「どうして書き直したり塗りつぶしたりしたのですか」

「もともとこうなっていたのだ。理由はわからない」と韓遂。

「まさか、下書きを人にとどける者がいますか。きっと叔父上おじょうえには、私に知られてはいけな

いので、手を入れられたに相違ない」と馬超。

「曹操がまちがって下書きを入れ、封をしたのではあるまいか」と韓遂。

「そんなことは信じられない。曹操はよく気がつく人間だから、間違うわけがない。私は叔父上と力を合わせて逆賊を殺そうとしているのに、なぜこのようなことをなさるのか」と馬超。

「信じられないのなら、明日、私が曹操を呼び出すから、おまえは出陣して突撃をかけ、鎗の一突きでやつを殺せばよい」と韓遂。

「それではじめて、叔父上の本心が確かめられるというものです」と馬超。

二人の手筈がきまると、翌日、韓遂は出陣した。馬超は軍門のかけに隠れていた。韓遂は曹操の本陣の前に人をやり、高い声で叫ばせた。

「韓將軍には丞相とお話したいとのことです」

曹操は曹洪そうこうに、陣の前に出馬して韓遂と会見させた。数歩のところまで来ると、曹洪は馬上でお辞儀じぎをしながら言った。

「昨夜、丞相には將軍のお話、しかとお聞きになりました。くれぐれもお間違えのないように」

言いおわるや、馬首をめぐらしもどつて行った。

馬超はこれを聞いて激怒し、鎗をかまえ馬を飛ばして、ただちに韓遂を刺そうとしたが、諸将がさえぎり、陣営にもどるよう説得した。

### (解説)

武勇においては無類むるいの強さを發揮する馬超ですが、頭の働きがもうひとつで、賈詡かくの手紙を使った計略に簡単に引っかけかかってしまい、韓遂を刺し殺そうとします。

あやうく殺されかけた韓遂は、このあと諸将と相談して曹操に降伏しようとしています。馬超は、その相談の場に切り込み、韓遂の左手を斬り落としてしまいます。馬超と韓遂を離反りはんさせる計略は、見事に成功しました。

そのとき、曹操軍が攻め寄せて馬超軍を打ち破ります。馬超は、敗残の兵をまとめて落ちのびていきます。

『三国志演義』は、韓遂がここで曹操に降伏することになっていますが、『三国志』では、馬超ともども西の涼州りょうしゅうへ逃亡していきます。

こうして、関中を平定した曹操は、夏侯淵かこうえんを長安に残して許都きよとに帰還していきます。許都

では献帝けんてい自ら城外で曹操を出迎え、曹操の威勢は天下に響き渡ります。

この情報は、関中に隣接する漢中の張魯ちやうろのもとに届きます。曹操の次の目標は自分だと考えた張魯は、南の蜀えきしゅう（益州）を合わせて態勢を強化し、曹操の来襲に備えようとしています。

蜀の支配者の劉璋りゅうしょうは、張魯の侵攻を恐れ、これに対抗するため曹操の援助を受けようとしています。そして、使者として派遣されたのが張松ちやうしょうでした。

張松については、『三国志』先主伝の注「益部耆旧雜記」えきぶききゅうざっぎに、張松は生まれつき小男で、勝手気ままに振舞ったが識見と判断力には優れていたとあり、「劉二牧伝」りうにぼくには、曹操はこのときすでに荊州を平定し、劉備を敗走させていたので、張松を齒牙しがにもかけなかったとあり、『三国志演義』はこの二つの記事を脚色して話を盛り上げます。

『三国志演義』は、張松の容貌ようぼうを次のように設定します。

「（原文）額鑿頭尖、鼻偃齒露、身短不滿五尺、言語有若銅鐘」

訳すと、「額ひたいは鑿くわのようで頭かぶは尖り、鼻はひしゃげて（偃えん）齒は出て、背丈は低く五尺に満たず、声は銅の鐘のようだった」

また、「（原文）操先見張松人物猥瑣、五分不喜（操、先に張松の人物の猥瑣わいさなるを見、五分喜ばず）。訳…曹操は張松の容貌が見苦しいのを見て、なかば不快だった」とあり、曹操は

彼の顔立ちに、嫌悪感を覚えていきます。

『三国志演義』には、よく似た容貌の人がもう一人登場します。それは龐統です。孫権が龐統に初めて会ったときの印象は、「(原文) 權見其人濃眉掀鼻、黑面短髯、形容古怪、心中不喜」です。訳すと、孫権が其の人を見ると、濃い眉にひしゃげた鼻、黒い顔に短い鬚、顔立ちの奇怪なさまに、不快を覚えた」

同じく劉備が抱いた印象は、「(原文) 玄德見統貌陋、心中亦不悅」で、訳すと「劉備は龐統の容貌が醜いを見て、心に不快感を覚えた」

『三国志演義』の二大へんてこ顔が、張松と龐統です。

### (本文抄)

劉璋は、張松を使者として派遣することにした。張松はこっそり西川(蜀)の地図を描いて隠し持ち、許都に向かった。荊州にこの情報をもたらす者がいたため、諸葛亮はさっそく許都に人をやり、事情を探らせたのだった。

さて、張松は許都に到着すると、毎日、丞相府に出向き、曹操に面会を求めた。

張松は三日間も待たされて、やっと姓名を伝えることができた。曹操に近侍する者はまず



賄賂わいろをとつてから、やつと張松を奥へ案内した。曹操は張松が挨拶しおわると、たずねて言った。

「おまえの主君の劉璋はここ数年、貢ぎ物を献上していないが、これはどういうわけだ」

「途中に難所が多く、盜賊に奪い取られる恐れがありますので、献上できませんでした」と張松。

「わしは中原ちゅうげんを平定したから、盜賊などいはいはずだ」と、曹操は叱責しっせきして言った。

「南に孫権、北に張魯、西に劉備がおり、少ない者でも十万以上の軍隊を擁しております。どうして天下太平だと言えましょう」と張松。

曹操は張松の外見が貧相なのを見て、不愉快だったところに、この辛辣しんらつな発言を聞いたので、袖そでを払って立ち上がるなり、奥に入ってしまった。

（※曹操は腹をたてて引っ込んでしましますが、張松の才能を認めた楊修ようしゅうに言われ、曹操軍の威勢を見せつけて、張松を恐縮きょうしゆくさせようします。）

楊修は、翌日、張松とともに練兵場れんぺいじょうに行った。曹操は勇壯ゆうさうな虎衛こゑいの精兵五万を、練兵場に勢ぞろいさせた。

無数の鎧かぶとがきらめき、戦袍が輝き、銅鑼が天を震わせ、矛が日を受けてきらきら光っている。四方八方に隊伍を整えた部隊、翩翩とひるがえる軍旗、人も馬も空を舞って疾駆するようであった。

しばらくして曹操が張松を呼んで、この光景を指さしながら言った。

「蜀でこんな英雄豪傑を見たことがあるか」

「私は蜀でこれほどの軍勢は見たことはありません。蜀はただ仁義によって国を治めておりますから」と張松。

曹操は顔色を変えて睨みつけたが、張松がまったく恐れるようすもないので、楊修はしきりに彼に目くばせした。

と、曹操は言った。

「わが大軍の到るところ、戦えば必ず勝ち、攻めれば必ず奪い取り、わしに従う者は生きられるが、逆らう者は死ぬのだ。おまえはこのことを知っているか」

「丞相が、戦えば必ず勝ち、攻めれば必ず奪取なさることは、私も存じ上げております。昔、濮陽で呂布を攻められたとき、宛城で張繡と戦われたとき、赤壁で周郎（周瑜）と対戦されたとき、華容道で関羽と出くわされたとき、潼関で鬚を切り落とし戦袍を脱ぎ棄てられ

たとき、渭水いすいで船に逃げて矢を避けられたときなど、すべて天下無敵の武勇談ぶゆうだんですな」と張松。

曹操は顔色を変えて怒り、「わしの失敗ばかりあげつらいおつて」と言うと、左右の者に「引きずり出して斬れ」と命じた。

楊修ようしゅうと荀彧じゆんいくが諫めたため、曹操は思い止まり、張松を棒でめつた打ちにして追い出した。

#### (解説)

せつかく、カモがネギをしょってきたようなうまい話にもかわらず、曹操は、張松を棒たたきにして追い返してしまいます。なんなく蜀が手に入るというのに、張松の自分を愚弄ぐろうするような言動が頭にきたのです。

曹操は戦いに強く、ざっと見たところ八割がた勝っているように思います。戦いに負けていたら勝ち残っていませんので、当たり前の話ですが。しかし何回かは手ひどい敗北を喫しています。

張松が皮肉たつぷりに、さすがは天下無敵ともち上げたのは、濮陽・宛城・赤壁の戦いなど負け戦ばかりでした。出会って張松の容貌に嫌悪感を抱き、それに加えて、この辛辣しんらつな言

い方が、曹操の痛かんにさわったのです。

曹操を恨んだ張松は、このあと予定にはなかった荊州へ立ち寄り、劉備の様子を探ろうとします。『三国志演義』は、一か所さりげなく、諸葛亮が、張松が曹操のもとに赴いたことを聞いて人をやつて情報をさぐらせたと周到に書き入れて、次への伏線にしています。

張松は、曹操に追い返されますが、その足で荊州へやつてきます。諸葛亮は、すでに曹操のもとで何があつたかをつかんでいて、趙雲や関羽を迎えに出して、張松を丁重ていちょうにもてなしました。そして、張松は、自ら出迎えにきた劉備の姿に深く心を動かされます。

劉璋の凡庸ぼんようさに失望していた張松の目には、この人こそ蜀を託すべき人物だと映うつりました。そして劉備に、蜀を取つて、そこを足がかりに漢王朝を立て直し、歴史に名を残せと勧めます。そして、重要な情報がいつぱいつまつた蜀の地図を、劉備に献上しました。

その後、蜀にもどつた張松は、劉備を迎え入れて漢中の張魯ちやうろに備えるよう、劉璋を説得します。裏に思惑おもわくがあるとも知らず劉璋はこれを受け入れます。そして、劉備をむかえるべく、張松の友人である法正ほうせいを劉備のもとへ派遣します。

法正もまた劉備に、蜀は「天府てんぷの地（天の倉庫のような豊かな地）」であるが、劉璋は無能で保つことができず、いずれ他人のものになるから、その前に取れと言います。

しかし劉備は、同じ漢室の血を引く劉璋を攻めることにためらいを感じ、なかなか決断できません。軍師の龐統ほうとうは「決断すべきときに決断しないのは愚かです」と、言葉を尽くして劉備を説得します。そしてついに劉備は決断し、龐統、魏延・黄忠らを従えて蜀へ向かいます。建安十六年（二二一）冬のことです。諸葛亮・関羽・張飛・趙雲は荊州の守備として残ります。

蜀では、黄権こうけんや王累おうらいらが劉備を受け入れることの危険を説き、劉璋を諫いさめますが、劉備を信じている劉璋は聞き入れません。

なかでも王累は、城門に自分の身体を逆さか吊ぶりにして諫言かんげんします。しかし、劉璋が聞き入れなかったため、自ら縄を切つて地面に落下して死んでしまいます。『三国志』の注に引く「華陽国志」では、王累は縄を解いて門前で首を搔かき切つて自決しています。

劉備は、成都せいとから涪ふまで出迎えに来た劉璋と会見し、互いに親密に交流します。

一方、龐統と法正は、劉備に、宴席で劉璋を殺して一気に蜀を手に入れるよう勧めますが、劉備は、蜀に入ったばかりでそんなことはできないと、まったく受けつけません。

そこに、漢中の張魯が葭萌関かぼうかんに攻め込もうとしているとの知らせが入り、劉備は軍勢を率いて葭萌関へ向かいます。劉璋は、そのまま成都へ帰っていきます。

劉璋が父の劉焉りゅうえんのあとを受けて益州（蜀）の支配者となったのは、益州の豪族たちが、劉璋の人柄が温厚で自分たちにとつて都合がよいと判断して、推挙したからです。また、諸葛亮は「天下三分の計」の中で、「劉璋は暗愚あんぐで、知能ある人士は明君めいくんを得ることを願っている」と述べています。陳寿は劉璋についての評で、「劉璋は英雄としての能力もないのに、領土を占めて世の中を混乱させた。柄がらにもない地位につき、領地をねらわれる羽目はめにおちいたのは、自然の道理である」と冷徹れいてつに批評しています。

乱世に向く人と平時に有能な人がいます。どちらもあわせ持てればいいわけですが、人柄が温厚なだけの劉璋は、当時の人びとからも、平時の人であつて乱世の人ではないと思われっていました。

一方、孫権は、劉備が蜀へ向かったことを聞き、荊州を奪う絶好のチャンス到来と計略をめぐらします。

その計略とは、劉備に嫁いだ孫夫人に、母の呉国太ごくにたいが危篤だと偽いつはりって報せ、呉に帰るときに劉備のひとり息子の阿斗あくともいっしょに連れて来させ、荊州と阿斗を引き換えにしようといふものでした。

(本文抄)

周善は命令を受けるや荊州へ向かい、船を長江岸に停泊させると、みずから城内に入り、門番に孫夫人への取次ぎを申し入れた。孫夫人が通させると、周善は密書を差し出した。孫夫人は母の呉国太が危篤だと記されているのを読み、涙ながらに様子をたずねた。

周善は平伏しながら告げた。

「国太さまにははなはだ病重く、朝な夕な、ひたすら奥方さまに会いたがっておいでです。もし遅くなれば、生きてお会いになれなくなるかもしれません。また、阿斗さまをひと目も覽になりたいとお望みです。どうか阿斗さまをお連れになって、会いに行かれますように」

「皇叔（劉備）さまは軍勢を率いて遠征中です。わたくしが帰ろうとするなら、軍師（諸葛亮）に知らせないわけにはゆきません」と孫夫人。

「しかし、軍師が、皇叔の許可を得てからにしてくださいと言われたら、どうなさるのですか」と周善。

「許しも得ずに出発すれば、面倒なことになりませんか」と孫夫人。

「長江に、すでに船が準備してあります。どうか今すぐ、車に乗り城外に出られますように」と周善。

母が危篤だと知り、うろたえた孫夫人は、ただちに七歳の阿斗を車に載せ、刀や剣をおびた三十人余りのお供を連れ、荊州城を離れて長江岸まで来ると、船に乗り込んだ。屋敷の者がこのことを報告にいったときには、孫夫人はすでに沙頭鎮さとうちんに着いて、船に乗っていた。

(解説)

孫権は劉備が蜀に向かうと、劉備に嫁いだ孫夫人に母呉国太ごこくたいが危篤であると偽り、劉備の後継ぎの阿斗(劉禅)を連れて呉に戻るように知らせます。

前に諸葛亮は、荊州の返還を求める魯肅にこう言って追い返しています。

「益州(蜀)の劉璋はわが君の弟(族弟)に当たり、同じく漢王朝の一族です。もし攻略すれば、他人に軽蔑され罵倒されます。かくて(劉備は)涙を流して苦しんでおられるのです」  
その劉備が、舌の根も乾かぬうちに蜀に向かったのですから、これは明らかに背信行為です。

魯迅ろしんは「中国小説史略」で、「劉備の温厚長重を表そうとするあまり偽物にせものくさく」と述べています。劉備は表向き温厚長重おんこうちやうじゆうを装い、その実、偽善者なのでしょうか。『三国志演義』はそのような描き方をしますが、しかし、劉備がただの偽善者であれば、諸葛亮や関羽など



あれだけの人材が心服しんぷくすることはなかったでしょう。『三国志演義』の劉備は、なかなかよくわからない人物です。

こうはいえないでしょうか。普段の温厚長重な姿も偽りのない本当の劉備、しかしこ一番というときには、普段の温厚長重さをかなぐり捨ててうってでる勝負師としての劉備。両面あわせもつ英雄であると。ここに劉備という人物の、不思議な魅力がひそんでいるように思えます。

(本文抄)

周善が船を出そうとしたとき、岸边から大声で叫ぶ声が聞こえた。

「船を出すのを待て。奥方にお別れのご挨拶を申し上げたい」

誰かと思えば、趙雲であった。趙雲は巡視じゅんしからもどつてこの話を聞き、取るものもとりにえず、追いかけて来たのだった。

周善は手に長い戈ほこを持ち、「おまえは誰だ。奥方さまの邪魔だてをするとは」と怒鳴りつけるや、兵士に命じて船を出させ、おのおの武器を持たせて、船上にずらりと並ばせた。船は急流に乗って遠ざかってゆく。

趙雲は追いかけてながら叫んだ。

「奥方が行かれるのはよいが、一言申し上げたいことがある」

周善はかまわず、ひたすら船の速度を上げさせた。趙雲がさらに十里余り追いかけたとき、岸辺きしべに一隻の釣り船つりぶねがないのであるのが目に入った。よしとばかり、馬を棄て鎗を手にとつて船に飛び乗った。船頭と二人で船を漕ぎ、孫夫人の乗る大船めざして追いかけたところ、周善は兵士に命じて矢を射させた。趙雲はこれを鎗ではじき飛ばすと、矢はバラバラと水に落ちた。

大船から一丈余りのところまで近づくと、呉の兵士は鎗でめくらめつぼうに突きかかってくる。趙雲は小船の上に鎗を投げ捨てるや、腰におびた青缸せいこうの剣をかまえ、呉の船めがけ身を躍おどらせてひとつ飛びすると、早くも船上にあがっていた。呉の兵士はみなびっくり仰天した。その間に、趙雲が船室に入ると、孫夫人は阿斗ふしろうを懐ふしろうに抱えて大声で怒鳴りつけた。

「無礼者、控ぶれいものえなさい」

趙雲は剣さやを鞘さやに収め、

「奥方さま、どこへ行かれるのですか。なぜ軍師にお知らせにならないのか」

「わたくしの母が危篤きじくなので、知らせる暇いとまがなかったのです」と孫夫人。

「奥方さまがお見舞いに行かれるのに、どうして若君をお連れになるのですか」と趙雲。

「阿斗はわたくしの子です。荊州に残しておけば、世話をする者がいません」と孫夫人。

「それはちがいます。わが君のご子息は若君一人だけです。私は当陽の長坂で百万の敵軍のなかから助け出したのです。それを、奥方さまが連れて行こうとされるとは、どういうわけですか」と趙雲。

「おまえは、どうして主家の問題にまで口を出すのか」と孫夫人。

「お引止めはしません、若君だけは置いて行かれよ」と趙雲。

「許しも得ずに船中に踏み込むとは、謀反を企んでのことだな」と孫夫人。

「若君を渡していただけないのなら、私は命にかけても、見逃すわけにはいきません」と趙雲。

孫夫人は腰元に命じて趙雲に立ち向かわせたが、趙雲は阿斗を奪い取り、舳先に出た。しかし、船を岸に着けようとしても助けがなく、船の者を斬りすてるのも君臣の義にはずれると思ひ、趙雲は進退きわまつてしまった。

孫夫人は阿斗を奪い返せと腰元たちに命じたが、趙雲が一方の手で阿斗を抱きしめ、もう一方の手で剣をふりかざしているのです、誰も近づくことができなかつた。しかし、趙雲はた

だ一人で何もできず、阿斗を抱きかかえて途方にくれた。

まさにその時、下流の船着き場から、十隻余りの船が横一文字に並んで漕ぎだした。趙雲が「今度こそ、呉の計略にやられたか」と思ったとき、先頭の船の大将が、大声で叫んだ。

「嫂上、わしの甥を置いて行つてくれ」

張飛は巡視中に知らせを聞いて、油江ゆこうから長江にでたとき、呉の船と出くわしたので、慌てて行く手をさえぎつたのだつた。張飛は剣をひっさげて呉の船に飛び移つた。周善は刀をしごいて迎え撃つたが、張飛は一刀のもとに斬り倒し、その首を孫夫人の前に投げ出した。夫人は仰天して言った。

「なんと無礼なことを」

「うちの兄貴（劉備）をないがしろにして、勝手に実家へ帰るとは、それこそ無礼ではないか」と張飛。

「母上が危篤で、明日をも知れないのです。殿さまのお許しを待っている暇はありません。どうしても帰さないというなら、このまま川に身を投げて死にます」と孫夫人。

張飛は趙雲に相談をかけて、「奥方を死なせたりしたら、臣下の道にはずれる。ただ阿斗だけはこつちの船に移そう」と言い、そこで孫夫人に向かって言うことには、

「わしの兄貴は漢王朝の皇叔で、嫂あねうえ上に恥ずかしい思いをさせたことはないはず。今日はこちらでお別れするが、もし兄貴の恩義を思うなら、早く帰ってきて下さい」  
言いおわると、阿斗を抱いて、趙雲とともに自船に帰り、孫夫人の船はそのまま立ち去らせた。

(解説)

『三国志演義』では、孫夫人は劉備とは年齢が三十歳近く離れていましたが、仲睦なかむつまじかったことにしています。後に劉備が亡くなった時、呉にいた孫夫人は西に向かって慟どうこく哭し、長江に身を投げて後を追ったことにしています。孫夫人は劉備への深い思いを持ち続けたとの設定です。

しかし前にも述べたとおり、史実では、孫夫人の存在は劉備側の脅威となっていて、劉備は厳格な趙雲に奥むきのことを取りしきらせています。そして、劉備が蜀に向かうと、孫権は孫夫人に劉禅と一緒に連れて来させようとしています。趙雲が張飛とともに取りもどしています。趙雲は「長坂ちやうはんの戦い」に続いて、一度も劉禅を危機から救ったのです。

趙雲は厳格げんかくで責任感が強く、自分の役割を着実に果たす人物です。劉備はそのような趙雲

を見込んで、孫夫人の監督という難しい仕事を任せただけでしょう。